

# Speaking Out Against Poverty

恵まれない環境で暮らす子どもたちの声

(日本語参考訳)

ページ番号は英語原文に即しています。

この報告書は、セーブ・ザ・チルドレン（以下 SC）に代わってアルスター大学のゴレッティ・ホーガン氏によって調査されまとめられたものです。

## 謝辞

研究者および SC は、今回の調査に参加し時間を割いてくれたすべての子どもたち、少年少女たちに感謝いたします。また、貴重な時間をとり、話し合いの場を提供してくれた放課後学級、ユース・クラブ、調査の手助けとなったプロジェクト関係者の皆様に感謝の意を表します。

ゴレッティ・ホーガン

アルスター大学

2009年2月

宇宙人のキャラクターは、子どもたち全般について幼い子どもたちに尋ねました...

## 序論

北アイルランドの子どもの貧困の程度や、貧困の中で育つことが大人になった時に与える影響については多く議論されています。この報告書の後編では、要約した文献に基づきそれらの議論について説明します。しかし、ここで紹介されている貧困層の子どもたちは、自分たちの人生がどういったものであるかについて聞いてもらえる機会がほとんどありません。ここではそうした問題を変えていこうと試みています。この報告書は、北アイルランド全域の都市部・農村部、プロテスタント・カトリック信者の6歳から11歳の70人以上と12歳から18歳の40人の意見を調査し、まとめたものです。最終章では、子どもたちの意見に基づき我々が学べる課題について見ていきます。

このプロジェクトは、北アイルランドの最も貧困な地域の恵まれない環境にある子どもたちを対象としています。しかし、私たちが接した子どもたちは、最も貧しく最も恵まれていないというわけではありません。貧困地域の放課後学級を通じて知り合った子どもたちの中には、最も貧しい子どもたちは含まれていませんでした。ほかの調査では、ほとんどの貧困地域の子どもたちは放課後学級に通っていないことが分かりました。私たちに協力してくれた子どもたちは、ユース・クラブやEOTASプロジェクト（学校外の教育プロジェクト）を通じて知り合いました。EOTASプロジェクトに参加する子どもたちは、ユース・クラブや放課後学級に通う子どもたちに比べ貧困層が多いことが分かりました。子どもや少年・少女たちは、彼らの生活について問われたわけではありません。宇宙人アニメのキャラクターが、若い子どもたちには子どもたち全般について問い、少年・少女には彼らの世代の子どもたち全般に関する質問をしました。子どもたちの意見を得るために実際に何を行ったか（方法論）については [22 ページ](#) に掲載してあります。

## “貧困”って何？

私たちと接したほとんどの子どもたちは、貧困線上またはそれ以下の生活をする家族出身であっても、それを自覚してはいませんでした。この結果は、英国や南アイルランドの子どもたちも同様です。彼らは、「貧困」＝「発展途上国に住む人々の貧困」のように普遍的なものとして見ています。これは、子どもたちに投げかけた質問「貧しい家族に生まれた子どもたちができないものはなんですか？」の回答によく反映されています。

...彼らは水汲みのために毎日 100 マイル歩かなくてははいけません。

彼らは食べ物が買えません。

彼らは学校へ行けません。

しかし、7歳以上の子どもたちに「貧しい家に生まれた子どもができないことは何ですか？」という質問に、「貧困」という言葉を理解している回答が比較的多く返ってきました。子どもたちにとって、任天堂やプレイステーション、または携帯電話や iPod などの消費物資を持ってないことはたいしたことではなく、むしろ、上記の英国やアイルランドの調査が示しているように、生活に必要なものが欠けていることを心配しているようです。政府の調査書によると、貧困層の子どもたちは放課後活動の参加ができず、自転車などの遊び道具などを持っていないことが多いのです。

彼らは遠足や課外授業に行けません。(女の子、9歳)

彼らはファンダーランド遊園地のような場所に行って遊ぶことができません。(男の子、9歳)

プールや映画館など、楽しい場所に行くことができないかもしれません。(女の子、7歳)

お金がないなら学校外の活動ができないでしょう。ボーリング場に行くこともできないし、お金がないからそれがどこにあるのかも見つけられないかもしれません。

何も遊び道具を持っていないから走り回るしかないかもしれません。

あなたたちはおもちゃを持っていないのでしょうか。

トランポリンを持っていないのでしょうか。

(男の子のグループ、7-8歳)

彼らは遠足や課外授業に行けません。(女の子、9歳)

## 悪い状況下でも前向きに考える

### 子どもたちはどう貧困と向き合うか

「あまりお金を持っていないことにいいことはありますか？」という質問に、子どもたちからたくさん異なる回答がみられました。最も多かった回答は、「自分自身で楽しみ方を見つけること、想像力や一緒に楽しむ仲間さえいればできる、子どもたちに長い間親しまれてきた遊びやゲームをすること」でした。

友達と遊んだり、追いかけてっこやいろんなゲームで楽しむことができる。(男の子、7歳)

鬼ごっこやかくれんぼなどで遊べる。あるいは、何もせずぼーっとする。

信号ゲーム

ぼーっとする

鬼ごっこ

(女の子のグループ、8-9歳)

厚紙があったらそれに絵を描いたり、人形を作ったり、切ったりしてものを作ることができる。

自分の想像力を活かして、物語を作る。

誰もが想像できないようなことを自分たち自身で作り出す。

(女の子、男の子のグループ、9-10歳)

何人かの子どもたちは、お金がないということは心配事が少ない、という意味だと答えています。

物を盗まれる心配がない。

宝石を取られないし、電話も盗まれない。

(男の子のグループ、10歳)

お金に関する心配事がない。元々何も持っていないので、十分なお金を持っているか、不足しているのでは、などと考える必要がない。(男の子、9歳)

特に8歳から11歳までの何人かの女の子たちは、物を無駄に消費しないという意味では、十分にお金を持っていないというのは良いことかもしれないと語っています。

お金をたくさん持っている、流行り物が欲しくなり、お母さんやお父さんに実際には必要ないようなものまでねだるようになる。でも家にお金がなかったら、お母さんやお父さんは何も買えないことが分かっているから、洋服にお金をかけることもない。(女の子、8歳)

この年頃の男女ともに、お金がないということは買い物をあまりしないということ、そしてその分遊ぶ時間が多く取れる、と考えているようです。

どこにも行く必要がないから、家に居られるし、外で遊ぶこともできる。  
ママが買い物へ行こうと誘ってこないし、遊びを邪魔されることもない。  
(男の子のグループ、7-8歳)

めんどろで買い物に行くのもおっくうな時もあるから、頻繁に物を買わなくて済む。(女の子、8歳)

しかしながら、10代の若者全員と数人の子どもたちは、お金を持たないことに良いことなどないと思っているようです。

良いわけがない。だってお金持ちができること何もできないんだもの。(女の子、8歳)

だめだよ。何も良いことなんてない。(男の子、12歳)

冗談でしょう? いいことなんて何があるの? (女の子、15歳)

ない、ない、何もなし。お金がなくていいことなんて。(男の子、15歳)



## 両親が収入のやりくりで苦労している事実を知っている子どもたち

親が子どもを貧困から守ろうと必死に努力をしていることは他の調査により分かっています。子どもたちの大半が、親が収入を得るためにどれだけ苦労しているのかをよく理解し、欲しいものも我慢しているようです。私たちが話をした子どもたちは、自分の生活に関する質問以外は問われていません。それにも関わらず、親が経済的困難を抱えている為、金銭的要求をしてはならないということをよくわかっていると話してくれました。

*...でも、ママもパパも払わなくちゃいけないの。...私たちの学校で通知が出されたの。2ポンド払わなくちゃいけないって。ピーターパンの冒険(テーマパーク)に2ポンドでしょ、遠足用に2ポンド、他にもたくさんのに2ポンドかかるの。(女の子、9歳)*

12歳から18歳までの大きい子どもたちは、お金に関する心配が親にどう影響しているか、また、その心配が子どもたちにも影響しているということをよく理解しています。

*...ちょっと憂鬱になるかな。親が支払いなどで気落ちしている姿を見るのは...*

## 取り残されること

若者たちの生活について質問をした他の調査によると、貧困の中で育つということは、多様な意味で社会からの疎外につながるということが分かりました。この調査では、子どもたちは身近なコミュニティの中でさえ疎外感を感じているのではないかと懸念しています。ここでいう疎外とは、友達と出かける際必要なお金がないこと、お洒落な洋服が買えないこと、運動場での遊びに入れてもらえないこと、お返しができないことを理由に誕生日会や日帰り旅行に呼ばれないこと、等を含んでいます。

彼らはパーティにも映画にも行けないわ。

調査員：「なぜパーティにも行けないの？映画館と違ってお金を払わなくてもいいんじゃない？」

だってお誕生日のプレゼントを買えないかもしれないし、車を買うお金もないから友達のおうちにも行けないから。(農村部の女の子、9歳)

からかわれるかもしれない。ゲームに入れず仲間外れにされてしまうかも。(女の子、8歳)

お友達と出かける時に彼らのママはお金をあげることができない。(女の子、8歳)

以下7歳と8歳の男の子たちは、親がお金を持っていない子どもたちは他の子どもたちと扱われ方が違うと認識しています。

誰も親切にしてくれないし、どこにも連れて行ってくれない。

ビーチや他どこにも連れて行ってもらえない。

ビーチに行くなら一人で歩いて行って、泳ぐときは全部服を脱がないといけない。

調査員：「でもね、みんなで海岸に行く場合、もし車の席に空きがあって、お母さんがもう一人連れて行ってもいいわよ、って言ったら？みんなお金がない子を連れて行くのは嫌だと思う？」

うーん、僕はいいけど他の子はなんて言うかな…。

十代の子どもたちの間では、貧乏人よりお金持ちが良い扱いを受けるのが当然というのが一般的な考えのようです。

みんな彼らを馬鹿にしているよ。

彼らは運動靴も名札付きのきれいな通学カバンも持っていないから。

調査員：「え？本当？彼らは軽蔑されているの？」

そうよ、小学校の終わりごろから始まって中学校からまた始まって、いつになっても終わらないわ。

(女の子、15歳、男の子、16歳)

## ここに住むのはどんな感じ？

公園の地面にはそこらじゅうにガラスの破片があって、小さな子たちが転ぶとそれが突き刺さって怪我をするの。

彼らの住む地域での問題は、幼い子どもたちと10代の子どもたちとではずいぶん違います。住む地域によって幼い子どもたちは以下3つのグループに分けられます;1)一緒に遊べる友達がたくさんいることをうれしく思い、友達と遊べる公園や草地があることに感謝している子どもたち、2)賑やかな都市に住んでいて、交通が激しいため外遊びが危険なことを不満に思う子どもたち、3)郊外に住んでいて、交通や公害の危険にさらされることなく外遊びを楽しめる子どもたち。また、地元の公園には、夜間に集まる若者たちが放置していくガラスの破片があるため、安全でないことが多いと文句を言っている幼い子どもたちのグループもいました。

大きなジャングルジムがあるよ。

そこには2つのジャングルジムがあって、下のほうも好き。だって大きな回転するものがついて  
いるから。

サッカー場もあるよ。

大きな丘も...

(男の子と女の子のグループ、8-9歳)

私は\*\*に住んでいて、周りにはお店も何もないの。お店も公園にも歩いて行くことは許されて  
いないから、うちの前の通りで遊ぶしかないの。

調査員：「それは交通量が多いから？」

そうよ。でも12歳になったら歩いて行ってもいいって。

(女の子、8歳)

郊外のほうがいいよ。だって車もたくさん走ってないし、町みたいにうるさくないからね。  
車が多くないから空気が汚染されることがなく澄んでいる。

田舎のほうがずっといいよ。広場を走り回ったり草の上に寝転んだりできるよ。

町よりもっとたくさんの動物を見ることができるよ。

(女の子のグループ、7-8歳)

公園の地面にはたくさんのガラスの破片が落ちていて、小さい子どもが転ぶと怪我をするよ。(女  
の子、8歳)

住んでいる地域に関わらず、10代の子どもたちは、「この辺には何もない」とか、よく「この辺  
では、問題を起こすかいたずらをする以外やることがない」などと言いがちです。子どもた  
ちは自分たちが遊ぶ公園にガラスの破片が落ちていることへの責任を感じていますが、これは彼  
らの暇つぶしの一つだと主張しています。何人かの男の子たちは、宗教がらみの暴力や脅しによ  
る危険から、本来使用できる施設を利用できないことを不満に思っています。

少しお酒がある。すべての酒を飲み終わった後、瓶を割る以外することはない。(貧困地域に住む  
少年、16歳)

できることは道端でぶらぶらするだけ。  
みんなただ通りをぶらついて悪事をする。  
他にすることはない、破壊すること以外は。  
みんな子どもは盗人をしたり物を破壊したりするっていうけど、他にすることがないんだ。  
どこにも行けない。  
盗みをする奴もいる。

調査員：「ここには何かいいことはないの？」

良い日々もあったよ。もっと若いときはね。でも今はそうじゃない。どんどん無くなっていくよ。

調査員：「じゃあ、小さい子にはいいことがあるんだね。みんなお互い気をつけているんだ。」

公園があるけど、暗くなるので6時以降子どもたちはそこに行けない。明りもないしガラスでいっぱいだよ。

誰かが酒の瓶を持っていても文句は言えないよ。みんなやってることだから。

(貧困地区に住む少年たち、16 - 17 歳)

特にやることもない。サッカーだけ。学校やコミュニティ・センターでユース・クラブをやっているけど、つまらない。ティーンエイジャーのために学校や町中にディスコがあるけどそこには行かない。安全な場所ではないから。女の子たちにはそんなに悪い場所ではないだろうけど、男の子はいじめにあうから良くない。(小さな町に住む少年、16 歳)

10代の子どもたちは道端(街中)から遠のき、悪事をやめる方法を多く知っているようです。例えば、週末や夜12時以降もユース・クラブを開けることなどです。そこで働く職員にとっては都合のいいことでないことは承知しているので、もし子どもたちを信用するなら留まらなくてもよいと考えています。子どもによる子どものための場所とは、子どものグループによって作られるものです。

ユース・クラブはナイトクラブが開くような時間に開いているべきだ。ただ、そこにはお酒も薬物もない。(少年、16 歳)

## 学校に通うための費用

すべての子どもたちは学校に通うためにかかる隠れた費用について十分理解しています。制服などのアイテムから課外事業や学校給食に至るまですべての費用をリストにできるほどです。

プールに行くときや、バスに乗ってどこかに出かけるときには払わなくてはいけません。ファーマナ群に行くときはお金がかかる。(女の子、9歳)

調査員：「他に払わなくてはいけないものはある？」

泳ぎに行くとき。1ポンドよ。

ふつうは1.7ポンドなんだけど学校で行くと1ポンドなの。

以前は払わなくてよかったんだけど、今は違うの。

ある年にはオリバーに行ったけど3.5ポンドかかったわ。

アメリカン・フォーク公園に行ったときは5ポンドだったよ。

(女の子のグループ、10歳)

そう、プールに行く時。1.3ポンド払うよ。あとロッカー代も必要。(女の子、10歳)

ママが働いていたら食事代を払わなくちゃいけない。

うちはパパだけが働いているけど、すぐには帰ってこないよ。

(男の子のグループ、9歳)

6,7歳の小さな子どもたちすら、学校が無料であるべきなのにいろんな費用がかかりすぎると思っています。

調査員：「学校へ通うにはお金を払わないといけないの？」

いいえ！もし払ったら何にもお金が残らなくなっちゃう。だって週に5回も通うんだもの。

調査員：「ジュースを飲むのにお金がかかる？」

ジュース代も食事代も！ジュース代は毎週月曜に30ペニー。時々食事代を払う人もいるけど、今は払わなくていいの。もう少ししたらお弁当を持っていくかもしれないってママが言った。

調査員：「遠足に行くのにもお金がかかる？」

うん、6.5ポンド持ってこなくちゃ。動物園に行ったから。

(女の子と男の子のグループ、6-7歳)

上記の子どもたちに比べ、金銭的問題がなく、放課後の活動費も払えるような生活をしている子どもたちの状況はだいぶ異なるようです。

月曜はネットボールをしに行って、火曜はダンス教室、木曜は合唱部に通っています。

調査員：「お金を払うの？」

ダンス教室だけね。12週間で30ポンド、一気に払うの。

(裕福な地域に住む女の子、10歳)

しかし、裕福な地域に住む子どもたちでさえ、家族内でお金は自由に使えるものではないことを分かっています。

私のママは私たち3人姉妹の遠足代を14ポンド払わなくちゃいけないの。お姉ちゃんは農場へ行くし、他のお姉ちゃんはW5に行くし、私は友達とCarrickfergus城に行くのよ。(女の子、9歳)

## 北アイルランド、貧困の新しい形

### 移民家族の子どもたち

子どもたちの多くは自分自身、または自分の友達を、“ほとんどお金を持たない” 家族出身とは考えません。しかし、移民家族は貧しい生活をしているとみな知っています。貧しい子どもたちを知っているか、という質問に対して大抵は誰も知らないと答えます。移民家族がいる地域に住む子どもたちは例外です。この子どもたちが言うには、移民の子どもたちは他の子どもとは違った扱いを受けているようです。

調査員：「あなたの学校には親があまりお金を持っていない子どもたちがいると思う？」

うん、何人かいるよ。2人リトアニア人がいる。  
リトアニア人が2人、ポルトガル人でしょ、あとポーランド人も。  
リトアニア人！  
アフリカ人がたくさんいる。

調査員：「それで、その人たちは違った扱いを受けているの？」

うん、時には彼らの親が彼らに違った扱いをするんだ。それに学校の行き帰りも歩かせるんだ。私が言おうとしたのは... たぶん、中には学校に来るけど私たちみたいにちゃんと制服がそろってなくて、ほんの少しのTシャツやズボンしか持っていないんじゃないかしら。ネクタイもジャンパーも持っていないくて。

調査員：「それが原因でみんな彼らを差別するのかな？」

うん、だって彼らは僕らと同じじゃないもん。  
(女の子と男の子のグループ、9歳)

子どもたちは事実にとっても正直で、学校内でも外で遊ぶ時も、移民の子どもたちが偏見を持たれていることを分かっています。

...もし靴下も靴もなければ石の上を歩かなくちゃいけない。

調査員：「君は北アイルランドには靴下や靴が買えないほど貧乏な子どもたちがたくさんいると思う？」



僕の近所には黒人がいるんだけど、4人の小さな子どもたちとお母さんで住んでいるんだ。彼らはあんまりお金を持っていないよ。

調査員：「彼らが外で遊んでいたら違った扱い方をする？」

うん。

調査員：「どういう扱いをするの？」

ののしるんだよ。人種差別的なことを言ったりさ。

(男の子、10歳)

10代の若者は北アイルランドに到着する移民に対して複雑な思いがあるようです。彼らを脅かすものとして見、ひどい口調で意地の悪いことを言う子どもたちもいました。

近頃はどこで仕事を見つければいいの？仕事をとってしまうのはみんな外国人よ。どこに行ってもリトアニア人だらけ。

以前老人ホームで働いていたの。どれだけの外国人があそこで働き始めたか定かではないけど。彼らは英語も話せないし、老人たちは何を言っているのかわからなくて困惑していたわ。

(若い女性グループ、17歳)

他の若者たち、特に少年・少女グループに属していて人種差別について話し合ったことのある若者たちは、移民に対してもっと感情移入した言い回しをします。

僕の見方では、みんな外国人がこの国に来て働いているって言うけど、この国の半数は働きたくないんじゃないかな。

多くの外国人が来ては仕事をしているけど、北アイルランド人の半分は働きたくない。

彼らがここに居ることに反対はしない。ここが公平な国でなかったらここから抜け出すよ。

僕が家庭を持ったらまず最初にすることは、世界のどこにいようが仕事を見つけて自分自身や家族のために頑張ること。それがみんながしていることだよ。この国に来ることを責めることなんてできないよ。

(若い男性グループ、17歳)

## 状況を改善するために政治家に何ができるか？

子どもたちに聞いた最後の質問は、貧乏な家庭で育つ子どもたちの状況を改善するために首相に何ができるか、というものでした。主な答えは家族がもっと収入を増やすことでした。住居を与えてあげる、という答えも多くありました。

お金をあげるね。400ポンドくらい送るよ。(男の子、9歳)

ただで家と食料を与えて支払ってあげる。後でお金が貯まったら返してもらおう。

もっとたくさんお金をあげる。

(男の子のグループ、7-8歳)

家々を回って貧乏な家族を見つけ、食べ物や衣服を買えるお金をあげる。(女の子、9歳)

もっといい生活、いい家、いい車をあげる。それが私がすること。

もっと素敵な服をあげる。

素敵な家や洋服。

新しい家やまともな家を与える。

犬が好きなら犬をあげる！(笑)

もっと楽しいことを与える。

もっと多くのおもちゃを与える。

電気や日常必要なものをあげる。

(女の子と男の子のグループ、9-10歳)

10代の子どもたちには、もし首相がやってきたら、何をこの地域に必要なものとして求めるかを聞いてみました。若者に影響する幅広い問題について話してくれました。例えば、もっと多くのユース・クラブを作る、よりよい仕事の必要性、貿易を学ぶためにもっと多くの見習い制度を作る、国による最低賃金の設定や、勉学に対する意欲の妨げとなる学費など若者への差別をやめる、といった若者に関する問題点です。しかしながら、彼ら自身が多くの重圧を受けているにも関わらず、自分たちより他人がよりよい条件に恵まれることを望むという興味深い結果となりました。ホームレスの人々、幼い子どもたちの設備、彼らの両親、イラクで戦う若い兵士たちの問題などといったことが、若者が取り組んでほしい課題なのです。

家をたくさん建てる。特にホームレスの多い所に。ベルファストでは、政府が寝袋や無料のサンドイッチを提供したり、無料食堂（スープ・キッチン）を開いたり、ホームレスや貧乏な人々のために施設を建てることができる。（男の子、16歳）

大学の学費を安くする。学費が払えないと誰も大学には行かない。給与が少ないと大学費用を稼ぐのに何年もかかる。（女の子、17歳）

遊び場を提供する。

この地域に何か楽しいものを作る。

税金を安くする。この通りにはたくさんのホームレスが住んでいて、実際使うお金より税金のほうが高い。

子どもたちが遊べる物を与える。

もっと多く職場を作る。

地域開発プロジェクトの訓練費用を増やす。

（少年、17 - 18歳）

ガラスの破片もなく、きちんとした設備のあるきれいな公園を造る。

自治体が公園を清掃しているところ見たことない。

公園でジュースを飲んで空き瓶をゴミ箱に捨ててたの。今やゴミ箱さえなくなったわ。

（少女グループ、17歳）

## なぜこの調査を実施したのか？

2007年、景気悪化が始まる前の北アイルランドでは、100,000人以上の子どもたちが貧困下にありました。さらに調査を進めると、英国のどの地域に比べても、北アイルランドの子どもの貧困が最も深刻であるということが分かりました。4年をかけて実施された第一回北アイルランド世帯アンケート調査によると、48%の子どもがこの調査期間中に一度は貧困、その中でも21%が3年もしくは4年の貧困状況であることが分かりました。北アイルランドの根強い子どもの貧困は、ロンドンの2倍と考えられます。これは深刻な問題です。子どもは一時的な貧困からは素早く回復できますが、反面、ロンドンの労働年金省の最近の調査によると、根強い貧困下にある子どもたちは前者に比べ、1) 病気や障がい長期に亘る、2) 定期的な運動をしない、3) 住環境、物資に恵まれないという傾向にあるといます。また、根強い貧困下にいる8歳以上の子どもたちは刑事沙汰を起こしやすく、中等学校の子どもたちは停学や退学になりやすい傾向があることが分かりました。

貧困状況にある人々を、彼ら自身の生活に関する「専門家」と見る考え方は新しく、子どもたちに自分たちの意見を聞くことは比較的まれなことです。しかし、子どもたちには聞かれるべき権利があります。国連子どもの権利条約12条では、子どもの持つ権利として以下のことが規定されています。

- ・子どもに関するどのような事柄においても自らの意見を表明すること
- ・子どもの意見は年齢と成熟度に従って、相応に考慮されること
- ・子どもたちに関するどのような事柄の決定プロセスにも実質的に参加すること

貧困の中で育つということは子どもたちの人生における機会に大きく影響するため、この子どもたちの「貧困下で成長する」ことに対する意見は重要なのです。

子どもたちの意見を有効だと思わない組織や個人は多数いますが、子どもたちの意見を取り入れたいと思っている人でさえ、実際には行動を起こしません。子どもたちが最終決定に参加したり、彼らの経験について意見を求められたいしない理由は多くあります。1) 子どもに意見を求めるのは困難である、2) 子どもの意見は影響を受けやすい、3) 子どもが問題について理解することができない、といった懸念です。

また、貧困や社会的疎外について語ることは、貧困下にいる子どもたちが偏見を持たれることになるのではないかという心配もあります。しかし、調査員たちは、子どもたちが自らの経験を安心して話せる多くの方法を考え出しました。

例えば、セーブ・ザ・チルドレン・イギリスとセーブ・ザチルドレン・ウェールズが、子どもと若者の貧困について意見を聞いた報告書「Bread is Free (パンはただ)」と「Listen Up! (聞いて!)」の中で、子どもたちは十分な食べ物がないこと、心地の悪い靴やベッドのこと、余暇の過ごし方など子ども時代の様々なことの欠如を語っています。この調査に参加してくれた子どもたちの経験は Youth Opportunity Card (学校外活動の費用を提供するプログラム) や Extended Schools (学校外の活動も含め、子どもたちが幅広いサービスを受けられる制度) の方針を作る際の助けとなりました。セーブ・ザ・チルドレンの子どもの貧困に関する数量調査「The Bottom Line」では、衣服、栄養のある食事、社会・余暇活動如など、日常必要なものが欠けているという問題点も挙げています。

貧困がどう子どもたちの学校生活に影響するかという最近の調査(ジョセフ・ラウントリー基金と SC の資金提供)の中で、イギリス、ウェールズの子どもたちが挙げた幾つかの問題点が北アイルランドでも表面化しました。貧困地区の学校に通う子どもたちは、学校給食、制服、遠足の費用を彼らの親の抱える問題として挙げました。イギリスとウェールズの恵まれない環境にある子どもたちは、正規の放課後活動にあまり参加しない傾向があります。こういった疎外が、貧困家庭の子どもたちを学校などの公式な学習の場でさらに不利な立場に陥らせているということも証明されています。北アイルランドでの小学生の経験を基にした調査でも、貧困地域に住む 9、10 歳の男の子たちは学校に幻滅し、徐々に離れていっているということが分かりました。この調査は Extended Schools 設立の具体化に影響を与えることになるでしょう。貧困の影響についての子どもたちの意見を述べた調査の国際的レビューでは、貧困がとりわけ子どもたちに影響するのは、貧困に伴う社会からの疎外が原因であるとしている。- これは本調査でも同じ結果が見られます。- 子どもにとって貧困とは周りから取り残されることであり、それは大人にはなかなか見えてこないものかもしれません。

よって、今こそ北アイルランドの子どもたちの生活に影響するこの問題について耳を傾けるべきなのです。特に、貧困の中で生きる子どもたちの意見や経験が、北アイルランド政府の子どもの貧困政策（Lifelong Opportunities: 北アイルランド貧困撲滅政策）に反映される必要があるのです。

## 調査方法

この調査の過程で話した子どもたちは、貧困地域の放課後活動や地域コミュニティー団体など様々なルートで集められました。最も貧困な地区 10%に入る区を都市部の調査対象として選び、農村部の子どもたちは、地元の小学校で無料給食の配布数の多い地域から選びました。

インタビューは、大きな子から小さな子までを対象に、少人数グループごとに行われました。6歳から18歳までの総計116人の子どもたちがインタビューを受けました。6歳から11歳の子どもたちには宇宙人のキャラクターを使って、「おうちが貧しいと、子どもたちができないことってある？」、「お金がなくてよいことってある？」、「お金を持っていない子どもはほかの子どもや大人から、別の扱いをうける？」、「お金を持っていないと子どもたちの楽しみ方にもかわってくる？」、「親がお金を持っていない家の子どもたちは将来良い人生が送れる？」などの質問をしました。

大きな子どもたちや若者たち(12歳から18歳)にも同様の質問をし、3つの違った家で生活する若者のスケッチを示しました。それらの家は、1)1戸建てのとても大きな邸宅、2)大きな庭園付きの平屋住宅、3)かなり荒れた国営の共同住宅、です。このスケッチによって議論を促し、個人的なことには触れず社会的な違いについて話し合うことができました。

この調査方法と、質問は全て3人称複数形で行われたことにより、子どもたち自身の経験を聞いているのではないということを保証しました。もちろん子どもたちの中には自分自身の経験を語る者もいましたが、課題についてどれだけ心地が良いか悪いかによって、主体から客体の立場まで自由に移動できるようにしました。

## 政策提言

他の研究によって意見を求められた子どもたちや若者も同様に、彼らが主に政策提案として挙げているのは、給付金や低賃金で生活している世帯の所得レベル向上の必要性でした。子どもたちや若者が話したことからも、家族がお金を十分に持っていない事は次のような影響を与えることが明らかです。多くの子どもたちや若者が親にのしかかるプレッシャーを心配すること、そして親がお金の不安を感じている間は勉学に集中したり、幼少時代を楽しんだりすることができないということです。また、今まで見てきたように、子どもたちはレジャー設備や営利的な社会活動からだけでなく、友達の誕生会や遠足からも省かれることをも意味するのです。子どもたちが実際の学校費用について言いたかったことは、他の研究結果にも反映されています。小学校の制服の普及を早急に広げる必要があります。給付金に頼って生活している家庭や税控除を受けている家庭の子どもたちの修学旅行や学校遠足の費用についても対応すべきです。

イギリスの子ども・学校・家庭省(DCSF)の最近の研究によって、児童保護サービスの利用や様々な活動に参加しない貧困地区の生徒たちは、Extended Schools(学校拡大)プログラムをうまく活用できていないことが分かりました。しかしここで紹介している調査結果では、貧困から子どもたちを救う手段の一つとして、「*Bread is Free*」で子どもたちが提案した“Free School Day(無料の学校)”政策を実施することであると提案しています。この政策の意味するところは、教育とは本来自由であり、子どもたちが学校で必要な物の費用を心配することなく、放課後活動も含めあらゆる面で学校生活に参加できるということです。貧困は、子どもや若者が余暇活動や社会活動へ参加することを困難にさせてしまいます。映画、プール、ボーリング場へ行くというような活動は贅沢なものかもしれませんが、この子どもたちは自分たちの友達がしているように多くの物を買うことができないため、学校外で友達に会うことすらできないのです。社交生活だけでなく、学校でもよそ者として扱われている彼らの気持ちにも影響しているのです。他多くの研究においても、若者へレジャー施設を安価で提供する必要性を指摘しています。



移民家族の子どもたちの特殊なニーズは、政策立案者によって取り組まれるべきです。2009年2月、北アイルランドの教育省の発表によると、およそ1400万ポンドが外国語授業として英語教師や、多様な人種を含む総合教育プログラムの最初の3年間の費用として使われました。しかし、移民の子どもたちは学校の外でも厳しい貧困、孤立、差別と向き合っているのです。移民家族にはすべての給付金や還付金を受け取るという特別な対策が必要です。最貧困の子どもたちが貧困地区に住む他の子どもたちから受けているものと同様に、移民の子どもたちが他の子どもたちによって受けている社会的差別は政府の政策だけでは対応が難しいのです。人種問題を扱う総合教育プログラムの中に貧困理解を取り入れ、すべての学校がこれに取り組むことを義務化すれば、このような社会的差別を変えるのに役立つかもしれません。

年上の子どもたちや若者たちの経験は、経済危機以前ですら、十分な仕事、特に十分質の良い仕事があったということを示唆しています。貧困家庭で育った子どもたちは、多くの熱意や期待と共に人生を開いても、低賃金で低い技術の仕事しか得られないために、その希望は成人になるころまで続くことはめったにないのです。政府はより安定し質の高い職業を生み出す必要があるでしょう。手始めに、北アイルランド全域で、見習い期間の体制や有効性を調査し、若者たち、特に男性のニーズに見合ったように変えていかななくてはなりません。

若者たちは国で定めた最低賃金や給付金の水準に関する差別化にも不満を持っています。高校新卒者たちが抱えるであろう学費や多くの借金の問題は、大学進学を熱望している若者にとって大きな障害となっています。こういった政策は、貧困地域に住む若者にとって苛酷であり、見直す必要があります。

## 結論

子どもたちは、貧困の中で育つということについての重要な情報を提供でき、提供したいと願っていること、そして、自分たちや後に続く子どもたちの生活を改善するための有益な改善策を持っているということが、本調査や同様の調査から明らかです。セーブ・ザ・チルドレンは、子どもや若者の地域や国における改革や、子どもの人生における機会平等の改善へ全力を傾けています。子どもたちや若者の人生に影響する事柄に決定を下す大人たちは、今こそ子どもたちの声に耳を傾け、そしてこの子どもたちを問題の一部として見るのではなく、解決策として受け入れるべきなのです。